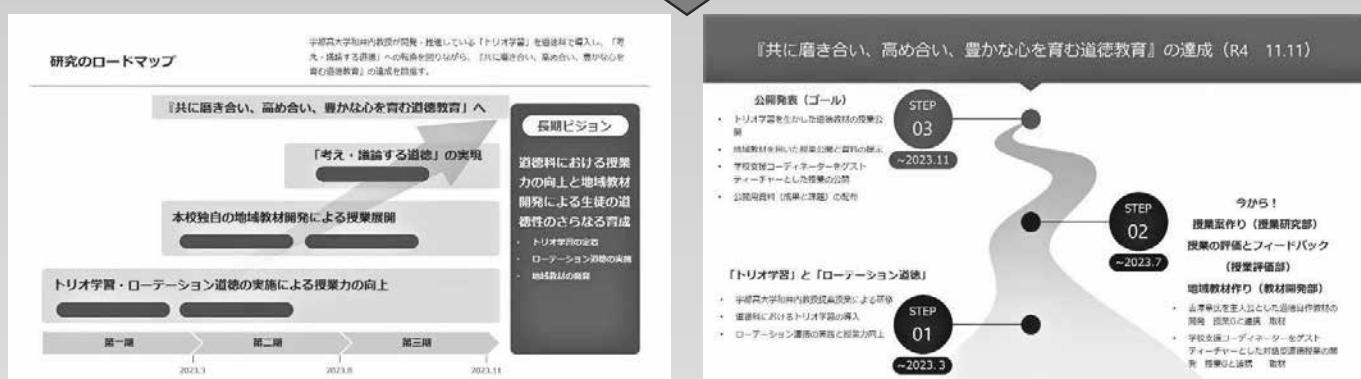


令和6年度 栃木県教職員協議会夏期研修会 第2分科会「道徳教育」 「特別の教科 道徳」を要とし、 よりよく生きるための基盤となる 道徳性を養う教育の在り方

【研究主題】

共に磨き合い、高め合い、豊かな心を育む道徳教育

提案者 上三川町立上三川中学校 教諭 中里 真大



* 本リーフレットでは、「特別の教科 道徳」を「道徳科」と表記します。



令和6（2024）年7月27日（土）

I 効果的だった取り組み等

1 道徳科の指導の創意工夫

(1) ローテーション授業の実施

- 教職員が交代で学年の学級を回って道徳科の授業を行う取組(いわゆる「ローテーション授業」)を行った。自分の専門教科など、得意分野に引きつけて道徳科の授業を展開し、何度も同じ教材で授業を行うことにより、指導力の向上につなげることができた。また、生徒一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することの大切さを全教職員で再認識することができた。

〈先生方の声〉

- ・ 生徒の反応を見て発問を代えるなど、回数を重ねる毎に授業内容を深化させることができた。
- ・ 担任として学級の生徒の新たな側面を知り、生徒理解につながった。
- ・ チームとして生徒に関わることで、授業の展開や発問についての悩みを共有し、よりよい授業に向けて取り組むことができるようになった。
- ・ 同じ教材で複数回授業を実施することで、発問や問い合わせの幅が広がり、多様な考えを引き出すことができた。



(2) トリオ学習の導入

- 3人グループで話し合う学習指導方法(トリオ学習)を取り入れて授業を実践した。少人数だからこそ生徒は本音を自由に話すことができた。また全体の発表の場面では、生徒同士が相互指名を行っていくことで、より主体的に授業に臨むことができた。



〈ローテーション授業の記録〉

ローテーション道徳		教材名 「段ボールベッドへの思い」	
○主題名 勤労	○教材名 「段ボールベッドへの思い」	授業者	
実施日 ① 10/17	② 10/24	③ 11/7	④ 11/14
実施学級 2年 1組	2年 2組	2年 3組	2年 4組
学習形態 一齊・グループ・トリオ	一齊・グループ・トリオ	一齊・グループ・トリオ	一齊・グループ・トリオ
○展開			
学習活動 (○基本発問 ◎中心発問)		学習形態 及び活用ツール	△変更・改善点
1〇「働くこと」のイメージは?		トリオ	
2 教材を読み、話合う。 【この意味はどうして段ボールベッドをつくった】			
★ローテーション道徳について 〈メリット〉 1回目、2回目の授業を3回目、4回目に生かすことができた。授業の流れを体でわかっているため、自信を持って授業に臨むことができた。			
〈デメリット及び改善点〉 授業を行うことに目が行きすぎ、生徒の評価にまで気が回らなかった。 それぞれの授業の評価を授業者同士で確認し合う時間を作るべきだと感じた。			

授業毎に記録を残し、「ローテーション授業」の改善を図った。

〈生徒の声〉

- ・ 先生によって進め方が変わって楽しかった。
- ・ 毎回新鮮な気持ちで取り組むことができた。
- ・ 次の道徳の授業が楽しみになってきた。



〈先生方の声〉

- ・ 話合いが活発になり、生徒が主体的に活動していた。
- ・ 普段発言が少ない生徒も3人というグループの中で安心して発言していた。
- ・ 「班の中には〇〇な意見もありました」という発言が増えてきて、多様な意見に触れることができた。
- ・ 他教科においても自分の考えを伝えようとする意欲の向上が見られ、道徳科とそれ以外の教科との相乗効果を感じた。

〈生徒の声〉

- ・ 意見発表の時に、特定の人が発表することが多かったけど、トリオ学習によって、みんなが意見を発表してそれを共有することができて良かった。
- ・ 3人のグループ編成なので、緊張せずに話すことができて良かった。
- ・ いろいろな人と会話ができたり、意見が聞けたりして、考えを深めることができた。

(3)「道徳コーナー」の設置、「道徳だより」の発行

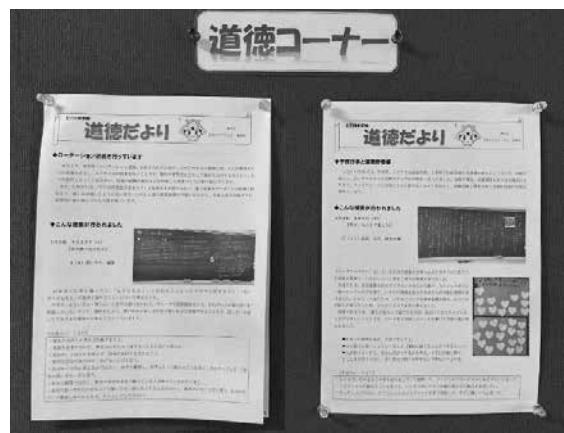
- 各学級に「道徳コーナー」を設置し、道徳だよりや道徳科の授業における生徒のコメントなどを掲示した。道徳だよりには、道徳的諸価値の解説や、授業の様子、生徒の記述の様子等を記載した。家庭にも配布し、授業の様子を伝える一助とした。

〈先生方の声〉

- ・他学級の授業の様子がわかり、とても参考になった。自分の学級でも取り入れてみたい内容が紹介されていた。

〈保護者の声〉

- ・「道徳だより」に載っていた内容について、家庭でも話し合いました。学校での授業の様子がわかってよかったです。



(4)「考え、議論する道徳」の充実に向けた工夫

- ① 自分の言語化されていない思いや考えを言語化することに慣れるために、言語化ノートを用意し、繰り返し活用した。長文で表現するだけでなく、イメージマップを作成したり、箇条書きで書いたりするなど、生徒の実情に応じて様々な書き方が見られるが、自分の思いを言葉で表現することへの抵抗は確実に小さくなっている。



〈言語化ノートのルール〉

- 言語化しよう！《言語化ノート》
表現力を伸ばそう！！
頭の中に浮かんだ気持ちや考えを「言葉にする」 = 「言語化する」練習をしよう！
ルール
- とにかくたくさん書く！
 - 火・木曜日の朝読の時間に書く
 - 3分間書く！（残り時間は続きを読書）
 - 専用のノートに文章を書く！
 - ていねいに書く必要はない！
 - 書く内容はどんなことでもいい！
 - ただし、個人名の誹謗中傷は書かない。
 - 他人のノートは勝手に見ない。
- ☆なぜだろう？と自分に質問してみよう

- ② ディスカッション型の学習活動を活性化させるために、「話し合いのルール」「発表の時の話し方」を作成し、道徳科の授業時に黒板に掲示した。意見を一方通行で伝えるだけでなく、他の者の意見を受けて対話する様子が見られるようになった。



発表の時の話し方

- ・「私は、（～だから）～だと思います。」
- ・同じ意見の場合
「私は～だと思いますが、班の中では～という意見が出ました。」
- ・トリオでの発表が終わった後、出ていない意見があった場合は、積極的に発表しよう。

道徳の話し合いのルール

- ① 全員で話し合いに参加する。
- ② 他の人の意見も尊重する。
- ③ 聞いていることを態度で示す。
- ④ 話し手は、相手が聞こえやすい声の大きさとスピードで話す。
- ⑤ 脱線OK

2 地域社会との連携体制の充実

○ 地域教材を生かした授業作り

本校の特色の1つとして、多数の地域の方が学校を支援してくださり、生徒と共に活動していることが挙げられる。そこで、地域の先人や地域人材を教材として取り上げ、身近な人々の生き方や考え方につれて触れることができる教材の作成を行った。生徒が自分のこととして、郷土を愛する態度や社会の一員としての自覚を高めるのに有効であった。

〈地域の方による学校支援〉



学校支援ボランティアと一緒に梅の実収穫



親父の会による池掃除



図書ボランティアによる昇降口飾り付け

(1) 【自作教材】第1学年『“折り紙”から“ORIGAMI”へ 創作折り紙作家 吉澤章』

主題名 よりよく生きるには(A-4 希望と勇気 克己と強い意志)

上三川町は、創作折り紙の世界的先駆者である吉澤章氏の生誕の地である。吉澤氏の生き方を読み物資料として作成し、その努力や強い意志について学ぶ学習を取り入れた。吉澤氏の生き方を通して、目標や希望をもって生きることが日々の生活の充実に繋がることに気づくことができた。



教材開発のため、「吉澤章折り紙ギャラリー」を訪問し、吉澤氏の生涯や作品の取材を行った。
収集した情報を基に、読み物教材を作成した。
当初「郷土愛」の資料を作成する方向で検討していたが、吉澤氏の力強い生き方から学ぶものが大きいと考え、「努力と強い意志」の教材を作成することとした。



吉澤章氏の折り紙による自画像

〈生徒の声〉

- ・ 自分の好きなことややりたいことは全力で楽しんで、一生の宝物にしたい。
- ・ 吉澤さんのように、高い目標を常にもち続けて、一つのことに全力で取り組みたい。自分のため、人のために尽力したい。
- ・ 私も住んでいる上三川町に少しでも恩返しができる人になりたい。



〈先生方の声〉

- ・ 教材を一から作るのはとても大変だったが、上三川町に住む生徒たちが自分のこととして捉えられるような授業作りに真剣に向き合うことができた。
- ・ 上三川町に関わる人物だから、生徒たちも強い関心をもって授業に取り組んでいた。



(2) 【ゲストティーチャーの活用】第2学年『消防団』(光村図書 きみがいちばんひかるとき)

主題名 社会の一員として地域や社会に関わっていくには(C-12 社会参画 公共の精神)

本教材は、生徒に社会の一員として地域に貢献することについて考えを深めさせる教材である。展開の後半で、町内に在住し地域貢献活動に尽力している方にゲストティーチャーとして話をしていただいた。生徒は、社会参画を身近なものとして捉え、関心を高めることができた。

〈生徒の声〉

- ・地域や社会のためにできることをやれるようになりたいと思った。
- ・他者を思う気持ちが大切だと思った。自分がしてもらった恩を返せる人になりたい。
- ・やってみたいという素直な気持ちから、少しでも挑戦してみたいと思う。
- ・とりあえずやってみようと気持ちが、大きな力へと変わっていくのかもしれない。



〈先生方の声〉

- ・身近な場所で活躍する人の存在を知ることで、授業の内容も自分のこととして考えることができた。
- ・自分も地域に貢献することができる、ということを生徒に感じさせることができた。
- ・生徒がゲストティーチャーの話に釘付けになっていた。

(3) 【ゲストティーチャーの活用】第3学年『「リクエスト食」を支える』(光村図書 きみがいちばんひかるとき)

主題名 働くことの意義(C-13 勤労)

本教材は、働くことの意味を考え、社会貢献や自身のやりがいといった面に気づかせる教材である。展開の後半で学校支援コーディネーターの話を視聴する活動を取り入れた。身近な方の「働く」ことについての考え方方に触れることで、より自分事として「働く」ことの意味を考え、他者や社会に貢献しながら自らの生き方を充実させようとする実践意欲を育てることができた。



〈生徒の声〉

- ・収入も大切だけれど、相手の笑顔や喜びを感じ、やりがいを感じていくことが、働き続けるために大切だと思った。
- ・やりがいや関わる人との関係など、仕事への向き合い方は収入面以外にもたくさんあることが分かった。自分ももっと広い視野で仕事について考えようと思う。
- ・役に立ちたい、認められたいという気持ちが働くことの支えになるのかもしれないと思った。



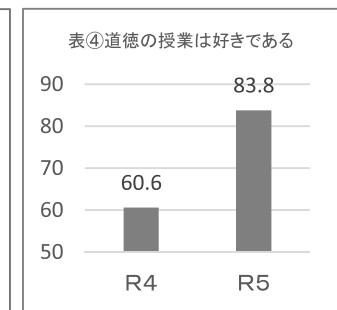
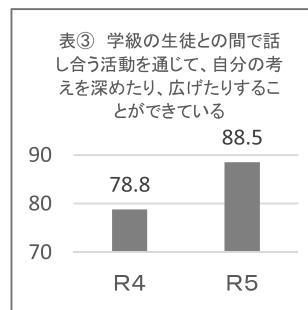
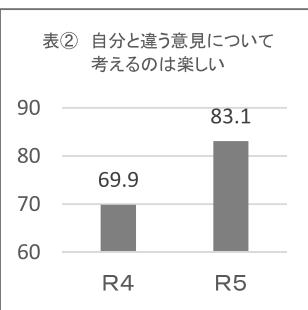
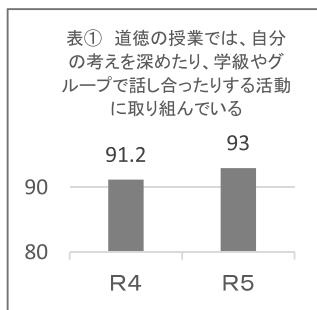
〈先生方の声〉

- ・学校ボランティアとして関わってくださっている方の活動や思いを知る機会となった。
- ・身近な人々の生き方や考え方を知ることで、教材の内容の説得力が増した。

II 成果および課題

- 道徳の授業において、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいると感じている生徒は、昨年度と比較し微増であった。(表①)従来から集団の中で自分の意見を述べることについては苦手意識を感じている生徒が多かったが、徐々に話し合いに対する抵抗が減り、自分の考えを述べることが当たり前と感じる生徒が増えてきているので、今後も継続して取り組んでいく。
- 教職員が交代で学年の学級を回って道徳科の授業を行う取組は、担任以外の教職員も授業者として加わるため、職員室でも道徳科の授業における生徒の変容を話す場面が多くみられるようになった。生徒の良さに目を向ける機会や授業改善を話題にする機会が増えた。また、繰り返し同じ内容を扱うことで教師の授業力の向上にもつながると考えられる。
- トリオ学習による話し合い活動では、生徒は自分の意見をグループ内で共有してから学級全体で発表することで、自信をもって発言することができた。3人という少人数のグループ編成は意見を交わしやすく、楽しみながら語り合う姿が見られた。(表②)また、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができるなどを多くの生徒が実感していた。(表③)
- 地域の先人を教材としたり、地域の人材を活用したりすることは、自分の身近なこととして教材を捉えやすく、生徒の学習への意欲の高まりが見られた。道徳科の授業はもとより、他の教科においても地域との関わりについて生徒が主体的に学習に取り組む姿が見られるようになった。
- 「道徳の授業が好きである」との回答が、昨年度と比較し20ポイント以上伸びている。(表④)今回の研究における様々な取組の成果と考えられる。
- △ 生徒は、話し合いを進んで行うことができるようになったものの、中心となる道徳的価値の理解を深めるために焦点化した発問や、多面的・多角的に自己を振り返る場の設定のあり方について課題を感じ、研究を継続したいと考えている教員が多かった。

表①～③令和4・5年度全国学力・学習状況調査
生徒質問紙回答結果より



〈今後に向けて〉

- ・「トリオ学習」を継続することで、生徒が自分の意見を述べ、他人の意見を受け止め、互いの意見を比較・検討し、道徳的諸価値について多面的・多角的に考えることができるよう、話し合いの工夫を更に図っていく。
- ・「ローテーション授業」の取組を通し、今後も各教員が同じ教材による道徳の授業を複数回行い、生徒の多様な反応や学ぶ姿から、更なる授業改善を図っていく。
- ・評価についてさらに研究を進め、生徒の実態をより把握した上で授業を改善していく。
- ・今後も、道徳科を要として、全教育活動を通じて本校における道徳教育の充実を図り、地域の特色を生かして「よりよく生きるために基盤となる道徳性を養う」工夫を図っていく。